

#### (4) 2.26事件の勃発とその位置づけ

東京帝国大学の雰囲気とは裏腹に、青年将校の暴走はとどまるところを知らず、1936（昭和11）年2月26日、クーデタが勃発するに至った。丸山が事件の第一報を受け取ったのは26日午前中のこと。当時NHKに勤務していた兄の丸山鐵雄（まるやまてつお）からであった。丸山が真っ先に心配したのは目前に迫った試験のことだった。

第一報は、NHKにいた兄貴から午前中に入ったのです。岡田首相以下ぜんぶ殺されたというのです。まだ戒厳令が出ていなかった。それで本郷にすっ飛んで行ったのです。そうしたら三月一日から試験ですから、「試験は予定通り実施するにつき、学生は平静に勉学すべし」という告示が出たのです。ぼくはてっきり試験がキャンセルになると思った。シメタ、と思って大学へ行ったら、法学部のアーケードのところにこの告示が出ていたので、ちょっとがっかりした。（『定本 丸山眞男回顧談』上）

事件当日の大学構内は「これからどうなるのか」という不安に包まれていた。さらに、決起した軍の部隊が東大に押し寄せる、横田喜三郎（よこたきさぶろう）や田中耕太郎（たなかこうたろう）など軍から攻撃されていた学者が襲撃されるなどのデマが飛び交い、全大学が息を潜めたように寂寞としていた。

当時、美濃部（達吉）先生が狙撃されて東大病院に入っており、また法・経両学部には、軍部や右翼に、前からにらまれていた教授が少なからずいたので、決起した軍隊が、東大にも押しかけてくるといううわさがあって、学内は不気味な緊張につつまれていました。（「一哲学徒の苦難の道」）

このとき丸山は本郷通りに出て、市井の反響を聞いて回っている。

ぼくは本郷通りをずっと歩きまして、街の反響を聞いて回った。(中略)ぼくの印象では、何が起こるかわからないという不安が第一。次には決起した将校に対する怒りです。二・二六に対して大方は批判的だった。とくに高橋〔是清〕蔵相はダルマと言って人気がありました。「あんないいおじいちゃんまで殺さなくてもいい」という素朴なものだけでも、批判が多かった。(『定本 丸山眞男回顧談』上)

丸山が反響を聞いて回った本郷通りの人々は、クーデタ部隊を直接目にしてはいるわけではなかった。伝聞によって事態を把握し、国民に比較的人気があった高橋是清が殺されたことに憤慨するなどの「余裕」があったのである。

だが、兄の鐵雄はNHKの記者として赤坂のクーデタ部隊を直接取材している。クーデタ部隊は朝日新聞などの活字メディアを襲撃したが、放送メディアを掌握しようとしなかった。クーデタ部隊が「抜け」ていたために、鐵雄はNHKの腕章をつけてクーデタ部隊の警戒網を潜り抜け、首謀者の演説も聞くことができた。

兄貴はすぐ、愛宕山のNHKのそばの赤坂へ出かけて行っているんです。今の日比谷高校の真下にあった山王ホテル。そこが蹶起部隊の本拠でしょ。(中略)「尊皇斬奸」、奸を討つという旗がひるがえり、群衆が遠巻きにしている。(中略)兄貴が見たのは、取り巻いている群衆の中のお婆さんが、こうやって涙を流しながら、「兵隊さん、財閥をやっつけてください。財閥をやっつけてください」と言ったというんです。(「1930年代、法学部学生時代の学問的雰囲気」)

鐵雄の目に映った2.26事件と、丸山が見聞きした2.26事件には大きな隔たりがあった。その夜、二人は寢床を並べながら事件の性格について議論した。鐵雄は事件を「根本的には進歩的」「革命的」なものと捉えていた。ここでいう「進歩的」とは、反資本主義的な思想を意味する。鐵雄は事件を社会主義革命の嚆矢と考えていたのである。

一方の丸山は、そうした捉え方には否定的であった。「いかなるファシズムも初期においては急進的だ。反資本主義的なことは、どんなファシズムも初期の段階では言うのだ」と鐵雄に反論している。事件を起こしたファシズム勢力を、前述した1933年の所感（本章(2)参照）における国家社会主義と同様のものと考えたのである。つまり、その反資本主義的・社会主義的主張はいずれ後景に退き、国家主義・ショーヴィニズム的色彩が前面化するという見通しに立っていた。丸山にとってファシズムは社会主義的をめざすものではなく、本質的に資本の利害に沿ったものとして位置づけられていたのである。見てきた現実も、それを捉える認識の枠組みも全く異なるだけに、二人の論争は平行線をたどった。結局、隣の部屋で

寝ていた母の「あなた方、いい加減に寝なさい」の声に水入りとなった（画像：左から丸山鐵雄・丸山邦男・丸山矩男・丸山眞男〈丸山彰氏提供〉）。

